

帝都

zonbitan

## 彼女の存在理由・・・その1

---

「私は泣かない・・・あの日そう決めたから・・・」

ジャックは木の上から一人の娘を見ながらあの日の奈津美の言葉を思い出していた

「この小娘か？局長が言ってたのは・・・とはいえ単身で・・・ってか形勢不利ってやつじゃね～のか？」

工場跡地かなにかだろうか？

かつては大きなコンクリート造りの建物だったのだろうがすでに半壊状態のその建物は手前の壁がすでになく工場の中が空洞状態が大きな洞穴のようにさえ見えてくる

その工場の駐車場、とはいえこちらもちらもちらでコンクリートにヒビが入っているその隙間から

雑草が生えているのが見える

「あちらさんは30人ってどこか？銃を使わないところを見るとそれなりに戦い方を知ってるみたいだな」

黒系の迷彩服の兵士が30cm程の長さの刀を手に次から次へと娘に切りかかっているのだが高速で移動する娘には致命傷を与えるまでには至らず・・・だが

それでも多勢に無勢という状況なのだから娘がジリジリと追い詰められていくのが普通だろうと思いきや

30人もいる兵士の方が逆に一人の娘に追い詰められているという奇妙な光景である

「軍隊の中ではそれなりに精鋭なんだろうがいかんせん移動速度が違いすぎるんだから小娘の方の勝ちって事なんだろうが、どうやらそうもいかないみたいだな、後ろで見物してるアホ面のあの三人の男たちはギリアム（覚醒者）だろうから、あの小娘はちと苦しくなるんと違うんかい？」

後方にいた三人のギリアムの中の一人が合図をすると兵士たちが攻撃を止めて身を引いていくその兵士たちの間から合図を送った男が娘の方へと姿を現した

「どうした？そろそろ限界か？」

娘は息を切らしながらそれでもその男を睨みつけている

「仲間はどうした？・・・とはいってもお前の仲間が来たところでなんの役にも立たないだろうが」

娘は両手に持っていた短刀を捨てると両手を開いて戦闘態勢に入る

「ん・・・？あの小娘もしかして奈津美と同じ夢幻刃の使い手か？・・・いや、違うな？」

娘の両手から少しずつ黒い霧のようなものがあらわれてくると

その様子を見ていた男がニヤリと笑った

「ふん、やっぱり覚醒者だったか、だがその程度ではどうしようもないな」

男の言葉が終わらないうちに娘が俊足で攻撃を仕掛けたがそのまま後方に吹き飛ばされてしまった

「ほう？俺の炎の風圧を利用してガードしたか？」

男は右の手で真っ赤な炎を作りながら言葉を続ける

「俺は炎を操るギリウム（覚醒者）だ、お前のその中途半端な能力では防ぎきれんぞ？」

それでも娘は攻撃を続ける・・・

だが、何度攻撃を仕掛けてもその他に炎の風圧で後方へ飛ばされてしまう

「いままでさんざん俺たちの邪魔をしてきたお前だがそろそろ終わりにしようか？」

そう言うと男は左手でも炎を作って両方の手の炎を一つに合わせる

「おいおい、それはちとやりすぎてやつじゃないんかい？」

ジャックはそうつぶやいて左手の親指と薬指を弾くと

その瞬間、敵の兵士たちの頭上で大きな爆発音が響いた

その爆発音で敵の兵士たちが頭上を見上げている間に娘の前にジャックが現れた

「誰だお前は・・・？」

炎を使う男がジャックに向かって叫んだのだがジャックはその男に背を向けたまま

「悪かったな、少し見物してたもんでよ」

突然目の前に現れた大男にビックリしたのか娘は不思議そうな目で見つめていた

「お前、その女の仲間か・・・？」

ジャックはその言葉にも反応を示す事なく背を向けたまま娘と話をしている

「しかしま～ずいぶんとやられたようだな？あとは俺がやるからそこの木の陰で休んでな」

ジャックが振り向こうとすると娘は男の攻撃を察知したのかいきなり攻撃に移ろうとジャックの脇をすり抜けた

はずだったのだが左手をジャックに捕まれてしまった

「おいおい、ちゃんと人の話を聞きなさい・・・」

娘は振り向いてジャックを睨みつけるとうめき声のような低い声で唸りながらまたも敵に向かっていこうとする

「おのれは奈津美かっちゅーの？」

ジャックは少しあきれたような顔で娘を見るとため息をついてから優しく語りかけた

「俺は強いから心配するな」・・・そう言っていると、つかんでいた娘の腕を放して笑ってみせた

## 彼女の存在理由・・・その2

---

ジャックの言葉に少しは気持ちが落ち着いたらしいがそれでもまだあきらめきれないらしく両手から湧き出ていた黒い霧が消える事なくまだ湧き出たままである  
その証拠にジャックの左の腕の隙間からじっとさっきの男を睨みつけている

「何か事情があるみたいだが、今のお前ではただ犬死するだけだぞ？」

その時、彼女の後方から20人くらいの集団がこちらに向かって走ってくるのが見えた  
その中の一人、おそらくはリーダー格と思われる男が走りながら彼女に向かって叫んだ

「リディア、大丈夫か？」

「ほう、お前、リディアって名前なのか？」

ジャックが娘に名前を訊いても後ろから名前を叫ばれても  
リディアは炎を使う男から一向に視線をそらそうとはしない  
そうしているうちに後方から走りよってきた集団がリディアを囲むように戦闘態勢に入った  
その中でリーダー格の男がジャックに訊いた

「あなたは・・・もしかして？」

「ん・・・？帝都だが・・・」

「帝都・・・？それじゃG2ユニットの・・・」

「ああ・・・で、あいつらは何なんだ？」

「奴らは第3遊撃隊、我が国と敵対しているバズリア国の精鋭部隊です」

「バズリア？それじゃお前らはサクリードの兵隊ってわけか？」

「ええ、私はアイルそして我らはサクリード国の国王親衛隊です」

「サクリードっていえば確か3年前にバズリアから独立した反政府軍だろ？」

「はい、その通りです」

「それなのにまだ戦争してるのか？」

「いえ、戦争はもう終わっているのですが・・・小競り合いはまだ続いたままの状態なのです」

ジャックが親衛隊のリーダー格アイルと話をしていると後方から声が聞こえた

「アイル大佐、これでは少し話が違うんじゃないのか？」

「我々はあなた方と事を構えるつもりはない、だからリディアを止めに来たのだ」

「それでは我々の提案を受け入れる用意はもう出来たのかな？」

「いや、もう少し待ってほしい・・・」

「別に我々としては待つ事には異論はないのだが、そちらの姫君の立場が危うくなると思うが？」

「姫は無事なのだろうな？」

「私としては別に危害を加えるつもりなどないのだが我が国には温厚な者たちばかりがいるわけでもないしな」

「どういう事だ？」

「うちの upper 層部にはそちらの姫君を殺してついでにサクリードに攻め込むべきだという者もいるという事だよ」

「なんだと・・・？」

「それでなくても、お前たちは我々との約束をたった今、破棄したではないか？」

「いや、まだ破棄などはしていない」

「では、我々に対して攻撃を仕掛けてきたこの小娘は何なのかね？」

「それはリディアが勝手にした事であり我々としても・・・」

バズリアのギリアム（覚醒者）とサクリードのアイルとの話を聞いていたジャックがフフンと鼻で笑った

「そういえばサクリードにはリカルド石の天然資源があるんだっただな？で、そのリカルド石の天然資源が欲しくて姫君をさらったと、ま、そういう事か？」

「はい、姫君と我が国の天然資源との交換を要求してきたのですが・・・」

「ですが・・・？それまではとりあえず停戦となっていたところにリディアがそれをぶち壊しそうだという事か？」

「はい、我々が目を離した際に・・・」

「んで、ひとつ訊きたいんだが・・・」

「はい・・・なんでしょうか？」

「その姫君をさらった奴ってもしかしてあいつか？」

そう言うとジャックはさっきまでリディアが戦っていた炎を操るギリアム（覚醒者）を指差した

「その通りです・・・」

「それでお前たちはそれを阻止できなかったのか？」

「Aクラスの覚醒者が相手では一個連隊でもあればなんとか抵抗も出来たのですが少人数ではどうしようもなく・・・」

ジャックはすぐ隣にいるリディアに優しく問いかけた

「リディア、お前は奴を倒したいか？それとも奴を殺したいか？」

リディアはジャックの顔を見上げると強き瞳で「殺したい・・・」と、即答した

ジャックはリディアの瞳の奥を覗き込むように見つめると  
聞き分けのない子供の頭をなでるようにリディアの頭の上に手を乗せた

「少し待ってな」

そうリディアに言うとジャックは振り返って敵対している兵士たちの方を振り返る

「おい、そこのアホ面3人衆」

「なんだ貴様は？」

「5分だけ時間をくれないか？」

「5分だと・・・？」

「ん・・・？なんだ5分待つのが怖いのか？」

「貴様、さっきから何を言ってるのだ？」

「今からちよいとこの小娘に魔法をかけるからそれまでちと待て」

「魔法だと・・・？」

「それで、もしこの小娘がお前に負けたらリカルド鉱石はお前らにくれてやるわ、どうだ？」

「お前にそんな権利があるというのか？」

「俺は怖いのか？と聞いてるんだ」

「ふん、まあいいだろう、好きにするがいい、だがその娘が俺に負けたらその時は遠慮なく攻め込ませてもらうつもりだし、まあどっちでも同じ事だ」

ジャックと炎を操るギリアムとの会話を聞いていたアイル大佐が慌ててジャックに訊き返した

「ジャック・・・？」



「ん・・・？」

「そんな約束などしても大丈夫なのですか？」

「誰が約束なんかしたんだ？」

「え・・・？」

「そんな事より、少しはこの小娘の事を褒めてやりな？」

「褒めてって・・・それはどういう事ですか？」

「お前たちの代わりに一番嫌な役回りをしようってんだからな、そうだろリディア？」

リディアは少し驚いた顔でジャックを見上げた

「ジャック、それはどういう事なんですか？」

「あいつらが約束とか取引とかまともに考えているとでも思っているのか？」

「しかし・・・」

「あいつらは初めから力づくでリカルド鉱石を奪うつもりだって事だ」

「そんな事をすれば世界連盟が黙ってないはずでは？」

「お前ら本気でそう思っているのか？」

「いや・・・しかし・・・」

「まあいいわ・・・」

「それでさっき言ってたりディアが一番嫌な役回りというのは？」

「ああ・・・それが、おいリディア、そのさらわれたっていう姫に頼まれたんだろ？」

リディアは何も答えないままジャックの顔を見つめている

「ジャック、いったいどういう事なんですか？」

「ようはお前たちに戦争の覚悟をさせたかったって事だ」

「我々に戦争の覚悟を・・・？」

「ただ、さらわれた姫がきっかけで戦争に突入する事は避けたかったって事だ」

「あの・・・言ってる意味が・・・」

「ようするにこのリディアが停戦を破棄すればその責任はこの小娘1人が負う事になる、違うか？」

「それは・・・」

「そして停戦が破棄になればお前たちは戦争を覚悟するだろうしその準備にも入るだろう？」

「まあ確かに・・・」

「さらわれた姫がお前たちに教えたかったんだ、停戦も約束も守るような相手ではないって事をな」

「まさか・・・」

「その姫っていうのが自分が人質になっている事で戦闘に少しでも躊躇するようならたちまち攻め滅ぼされてしまうと考えたんだろう、そこでこのリディアが強制的に停戦を破棄すれば否応なしにお前たちは戦闘準備に入って悪者はさらわれた姫ではなくてこのリディア一人って事になるって寸法だ」

「ちょっと待ってください・・・その理屈は分かりますがそれじゃ人質になっている姫はどうなるんですか？」

ジャックはリディアの頭をポンポンと軽く叩きながらアイル大佐の疑問に問いを返した

「まだ分からないのか・・・？」

「まだ分からないのかと言われても・・・」

「もう人質など何処にもいないんだ・・・」

「いないって・・・？」

「そうだろ、リディア？」

ジャックの言葉にリディアの両方の手首からまた黒い霧が浮かび上がり始めた

「リディア、今からお前を完全体のギリアム（覚醒者）にしてやる」

ジャックはリディア一人が背負っていた哀しみを包み込みように優しく言葉を声にした